

## 「体験ボランティア」から学ぶこと

著者	進藤 芳彦
雑誌名	生涯学習研究と実践：北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要
巻	8
ページ	73-88
発行年	2005-03-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00002285/">http://id.nii.ac.jp/1136/00002285/</a>

## 「体験ボランティア」から学ぶこと

### Lessons from Volunteer Experiences

進 藤 芳 彦\*

SHINDO, Yoshihiko

#### はじめに

2000年1月1日午前0時、20世紀最後の年の幕開けを、私は、小樽運河で迎えた。「小樽雪あかりの路2000カウントダウン」のボランティアスタッフとしてである。

「小樽雪あかりの路」は、毎年2月に開催され、今では、期間中50万人の市民や観光客が訪れる、冬の北海道を代表するイベントとして知られているが、当時の案内ちらしを見ると、「小樽雪あかりの路を世間に大々的に広めるプレ・イベントとして、12月31日に2000年カウントダウンを実施します。」「小樽運河に2000本のキャンドルが灯ります。」とある。「小樽雪あかりの路」の揺籃期のことであった。

当時、私は、北海道教育庁後志教育局に勤務しており、倶知安に住んでいた。いわゆる「2000年問題」で、2000年になった瞬間、何が起きるかわからない、といわれていた。世界中で、早くから、万全の取り組みがなされていたと思うが、やはり心配で、多くの企業で、その瞬間に対処する体制がとられたはずだ。道庁でも、関係部局の職員は、年末年始の休みを返上して勤務に就くことを命じられた。私は、幸い、その関係部局の職員には該当しなかった。

とはいえ、自分が、2000年問題には関わりがないよ、と言われ、例年のように家で新年を迎えることに、物足りなさを感じたことも事実である。そこで、2000年カウントダウン、小樽運河でボランティア募集という新聞記事に飛びついた。今考えると、ボランティアの動機は、その程度のことだった。

ボランティアスタッフの説明会に行くと、小樽市の観光セクションの職員と、熱心な市民の方々がいて、イベントの趣旨と、作業内容の説明があった。

作業内容 浮き玉キャンドルの設置補助

スノーキャンドルの設置補助

作業日程 29日 13:30~17:00 浮き玉キャンドルへの重り付け

30日 13:30~17:00 浮き玉キャンドルへの重り付け

31日 19:00~03:00 浮き玉キャンドル・スノーキャンドルの設置

---

\*北海道庁経済部観光振興課参事

既に、その年の2月に、第1回「小樽雪あかりの路」が開催されており、2回目は、こうしたい、ああしたいと、熱い思いが語られた。市の職員も、ことのほかフレンドリーで、熱心な市民の方々に対する敬意が感じられた。集まったボランティアたちは、世代も性別も多様、旧知の市民もいたようだが、全くの新人も含まれているように見えた。一部しか参加できない人もいたが、従事できる時間帯を率直に確認し合っていた。

29日、30日は、浮き玉キャンドルへの重りつけ作業。浮き玉の開口部から、ろうそく立ての金具をつるしたものに、運河の水上で安定して浮かぶように、鉛の重りをぶら下げる作業。時給500円どころか、内職なら、1個何円でやれといわれるような単純作業だが、ろうそくを立てる金具を完成させるまでの苦労話などを聞いたり、これが運河に浮かぶ様子を想像しながら、あっという間の半日であった。

31日は、運河会場で、スノーキャンドルの製作、バケツに雪を入れながら一升瓶を押し込んで、雪のコップを作る。運河散策路に並べ、窓を付けて、ろうそくを配置する。浮き玉キャンドルは、ロープを張って、固定したものと、風まかせで漂うように運河に放つものの2種。キャンドルがすべて固定ではおもしろくないので、漂わせようというアイデアだったらしいが、どうしても一カ所に固まってしまう。その内、この漂う浮き玉が、運河の外へ迷い出てしまった。手こぎボートで、小樽港内を搜索し、かなり遠くに接岸している船の片隅で心細く灯る浮き玉キャンドルを回収する作業は、印象深いものだった。

やがてカウントダウン、その瞬間、停電で真っ暗になる、ということはなく、花火と、汽笛とカリオンと、ふるまい酒でお祝い。相当な人出で盛り上がった。

私が、小樽雪あかりの道にかかわったのは、この3日間だけである。2月の本イベントの案内をいただき、手伝いたい気持ちはあったが、仕事の都合がつかず断念した。

わずか3日間、時給にすれば、せいぜい数千円のお手伝いである。しかし、楽しいボランティア体験であった。そして、内心、2000年をボランティアしながら迎えたのは、ちょっと格好いいかなと思っていたところがある。

その後、いろいろ考える機会があった。何しろ、年越しのたび、小樽運河を通るたびに、港に迷い出た浮き玉キャンドルのことを鮮明に思い出すのであるから。その内、私の受け止め方は、全然違っていただかもしれないと考えるようになった。

結論をひとことでいえば、わずかでもお手伝いをしたどころではなく、2000年をあの小樽運河で浮き玉を探しながら迎えるという、普通では出来ない体験を、何とただで（ボランティアで）させてもらった、と受け止めるのが本当ではないか。私のボランティア体験ではなく、小樽のあの方々による「体験（させる）ボランティア」ではなかったか、である。

以下、この体験から、いろいろ考えたことを、私なりに整理し、記したい。

## 1 私のボランティア体験

中学では、生徒会で花いっぱい運動を唱えていたほか、有志を募って、姫路城の掃除に出か

けたりしていた。高校では、いつの間にかインターアクトクラブに入っていた。あまり具体的な奉仕活動をした記憶がないが、大会で四国に行って、ロータリークラブの方々から激励されたことは、よく覚えている。浪人中、同年代の身体障害者のリーダーH. S氏と知り合って、何度か、車椅子で街へ出るお手伝いをした。重度障害の彼は、詩を書きながら、今も活動を続けている。もう、ずっと会っていないが、彼の詩は同人誌で読んでいる。

今から考えると、中学では自分がリーダーであるための打算があった、高校では、まともな部活が続かない代わりだった。浪人中は、受験勉強から逃れるために、集会に飛び込んだのがきっかけである。いずれも、動機には不純なものがある。

しかし、偽善かと問われると、ちょっと違うと思う。偽ったり、装ったりする余裕はなかった、その時々、自分としては切実なものがあったように思う。

その後、大学では、少し別のことを考えていた。公務員になってからは、たぶん、仕事で精一杯だったのだろう、ボランティアには関心が向かなかった。

## 2 道職員としての職務と民間活動

道教育庁の職員になって10年以上経過した1991年、はじめて役付き職員となり、まわりを見回す余裕ができた。あるいは、40代に突入し、これでいいのかと、むしろ焦りを感じたからかもしれない。目先の仕事以外のことにもう少し関心を持った方が良く考え、仲間を募って庁内で学習会を開いた。この試みは、わずか半年で頓挫してしまったが、自分にとっては、関心が外に向ききっかけとなった。

しかし、道職員が、ボランティア活動など、職務外の民間の活動に力を入れることについては、障害が大きい。仕事をちゃんとやってるのか、余力があるならそれも職務に向けるべきではないか。上司、同僚からの理解が得難いという外からの圧力ばかりでなく、自己規制してしまう面がある。「まともに自分の仕事ができない職員に限って、他のことに手を出す。」などの誹謗をよく耳にしたが、確信を持って反論できない自分も居たということである。

そこで、1995年、道庁不正経理事件である。就任したばかりの堀前知事が、道政改革に乗り出そうとした矢先のことで、翌96年にかけて、不正経理の全体を明らかにし、20億円以上を返還するとともに、信頼回復に向けて、改善プログラムの策定や、道政改革の基本方針、実施方針などに沿った具体的な改革が精力的に進められた。その中で、道職員の意識改革が強く求められるとともに、職員による政策開発を進めるため、民間有識者をリーダーとし、全庁からの公募職員と関係部局職員をメンバーとする「赤レンガ・政策検討プロジェクト（略称、赤プロ）」が設置された。

赤プロの設置目的は、あくまで道としての政策開発であるが、今や、道庁だけで完結できる政策は考えられないので、初回の赤プロのテーマの一つが「NPO活動の推進」であったことが象徴的に語っているように、道職員がそれまでの民間との交流や活動の成果を生かす機会が、知事から与えられたわけである。とはいっても、職場の上司、同僚の意識が一朝一夕に変

わるわけもなく、公募職員の中には、冷ややかな外圧に耐えながら、参加した者も少なくないと思われるが、公に認知された結果、少なくとも職員が自縄自縛に陥り、自己規制してしまうことは、少なくなったと思う。

1998年、知事部局に出向していた私は、図らずも、赤プロの一つ「北の世界遺産推進方策検討チーム」の事務局を担当することになった。現在、第1次25件、第2次27件、計52件が選定され、遺産ツアーも企画されるなど次第に普及しつつある「北海道遺産」を提案したプロジェクトである。この赤プロチームの運営に際しては、驚かされることが一杯あった。

### 3 道庁不正経理事件

道庁不正経理事件は、道政への信頼を損なう大事件だったが、個々の道職員にとっても一大事であり、私自身にとっても、大きな出来事であった。事件そのものは、構造的なもので、個々の職員の責任の軽重が問われることにはならなかった。全く、かかわりが無いとする職員もいたが、多くの道職員が、多かれ少なかれ、自らにも責任があると感じていたと思う。職員組合も、組合員のそうした受け止め方を背景に、返還のための一人1万円カンパを提起した。当時、組合員であった私は、少なくとも、その程度の責任は自分にもあるだろう、と感じ、これに応じた。

全体としては、職員互助会から借り入れて20億円余を一括返還し、10年計画で、その時々管理職がリレー方式で返していくことになった。私も、その後、管理職になった時、このシステムに加わった。今も、毎月、一定額を差し引かれている。もう少しで、完済できるようである。天引きだから、毎月その都度痛みを感じているかといえば、嘘になるが、折に触れ、「未だ終わっていないんだよなあ」、と思う。10年近くになるが、風化が、そもそも始まっていないといえる。

不正経理事件のころ、道職員は、小遣いで居酒屋に行く時でさえ、バッジを外してから、そこそと出かけ、仕事の話は極力しないようにしていると、親の職業を聞かれて子どもがづらい目にあっている、とか言われ、片身の狭い状況が続いた。私自身、そうしたことへの愚痴をついもらしたところ、民間人である長年の友人から、「本当に道民は怒っているんだよ。何を甘いこと言ってるの。」と本気で叱責されたことがある。また、後述する未来セミナーでのグループ討議では、何か言おうとする度に、民間人の参加者から厳しい批判が相次ぎ、怖い思いをした。まだまだ、受け止め方にギャップがあり、事態の重大さを痛感させられたところである。

### 4 「未来セミナー」と公共性

1997年、道庁をこれからどうしていくか、あるいは、北海道をよくするにはどうしたら良いか、ということで道職員のN.T氏などが中心となって「未来セミナー'97実行委員会」が組織され、何度か、公開のセミナーを開催するとともに、道政改革に向けた提言「101匹の猿の17

の決意」を作成し、配布された。また、その一環として、道職員のW. K氏などが中心となって「市民にとって開かれた道庁及びその周辺のあり方」というテーマでワークショップが開かれ、赤レンガ庁舎をはじめとした道施設の道民への開放などが提言された。

当時、地方分権論議が盛んな国内状況にあって、道職員や札幌市ほか市町村職員の有志や、北大をはじめとした大学の教授、北海道町村会、さらには民間でまちづくりや、行政情報の公開に関心の深い人々などが、それぞれ、職場で研究会を組織したり、大学で政策研究会を開いたり、あるいは、多数の自治体職員を集めて地方自治土曜講座が開かれたりと、メンバーは交錯しながらも、様々な活動が活発に展開されていた。そこへ、道庁不正経理事件が起こり、何か行動を起こさなければいけないという強い思いから、様々な立場のメンバーが結集して未来セミナーが組織されたのである。

このセミナーで印象深いのは、何といっても、公開セミナーで、これまで会ったことのない民間人から、激しい道庁批判、道職員批判が浴びせられたことである。何となく、趣旨に賛同した人たちの集まりだろうと思って参加した私としては、「これは、大変な場に来てしまったな、うかつにもものを言うと、とんでもない攻撃に遭う」、と実際恐怖を感じた。

それまでの職務経験でも、立場の違いから責められる場は経験していたが、このセミナーでは、そこにいる具体の道職員に対して怒っているのが、恐怖を感じたのだと思う。不正経理問題は、組織的、構造的問題として整理をしたけれども、この人たちは、個々の職員に対して怒りを感じている。気を引き締めて対処しなければいけない、と強く感じた。

もう一つ印象深いのは、ワークショップでの議論で、赤レンガ庁舎を道民に開放しようとしたとき、バリアフリー化が課題となるが、重要文化財であるため、手をつけられないというのである。赤レンガ庁舎は、入り口の石の階段からして、バリアフリーはおろか、一般市民をも拒絶しているように見える。中の階段も急で、「蒲田行進曲の階段落ち」になりかねない高さである。課題は残ったが、道庁施設の道民への開放という提言の趣旨は、その後、種々の施策に生かされ、前庭で各種イベントが開催されるとともに、今や、増大する東アジアからの来道観光客にとって、赤レンガ庁舎は代表的な観光スポットになっており、道民にも親しまれている。

未来セミナー'97は、その後、未来セミナー'98として継承され、公共性ということについて、議論を深めることになり、私も参加した。従来、官が公共性を独占してきたが、今やNPOをはじめとして、民間の中に、より高度の公共性がある。従来の民法その他の公益法人の中には、公共性の面で問題があるものがある。補助金や天下りによる、官の関与を止めるべきだ。など、学習と討論は重ねたが、堂々巡りの感があり、具体的な提言には至らなかった。

ただ、私としては、この議論を通じて、感じる場所があった。既に、NPOの代表などで、強固なミッションを持って活動している方々が少なくないことを知っていたので、民間の中にも、高度の公共性がある場合があることは理解していたが、公共性そのものであるはずの公務員が、さて、どの程度ミッションを持って職務に臨んでいるか、日々、公共性を自覚して

いるか、心もとなくなってきたのである。改めて考えてみると、公益法人にはそれぞれミッションがあるが、その従業員が、皆、同じようにミッションを持っているかという、極めて疑わしい。会社員も団体職員も、そんなに変わらないのではないか、という気がする。とすれば、公務員は、大丈夫なのか。

大丈夫でなければ、困ったことになる。公共に奉仕しなければ、法令違反である。しかし、公務員倫理のことを論じたいわけではない。最低限の服務の基本は皆がクリアできたとした上で、本当に大丈夫なのか、である。

ところで、営利企業にミッションはないのか。あつてはいけないということはない。利潤追求以外に志すものがあつた創業者は、少なくないはずで、意を体した社員もいるはず。さらに、会社を信じて、会社の発展そのものがミッションであつた場合はどうか、それはそれで幸いだったはずである、しかし、今、使い捨て、リストラ、多くの会社人間が、帰属する会社に裏切られ、経済的にも、精神的にも行き場を失っている。

NPOでも、ミッションを共有する者が集まって起ち上げたときはよいが、新たに職員を採用し、組織が大きくなれば、同様のことが生じてくる。

## 5 赤プロ「北の世界遺産推進方策検討プロジェクト」

ここで、赤プロを担当して驚いたことに触れておきたい。このプロジェクトは、元北大植物園長のT.T氏を座長とし、庁内公募で集まった職員と、関係部局の職員で構成されていたのだが、公募のメンバーがすごかったのである。未来に残したい、世界に誇れる遺産というテーマだったが、対象があまりにも広いのである。大自然、稀少動植物から歴史的な文化財、伝統芸能へと遺産の概念が各分野に及ぶことは私にもわかるのだが、どこそこの浜の昆布干し風景がいか、独特の漁の様子も遺産だとか、閉鎖された映画館の建物を残そうとか、どんどん対象が広がり、そのうち黒松内町には、かんじきつくりの名人がいて、遺産は人であってもおかしくない、となるのである。事務局の私には、わけがわからなかったのだが、公募のメンバーの間では、話が通じて、当然のことのように、議論が弾むのである。私は、宇宙人とは言語が通じないといって、抵抗していたが、どうやら、座長も宇宙人の方がよく話が通じるらしいことがわかってきた。おまけに、公募メンバーのF.K氏などは、絶対に妥協ということがなくて、説を曲げないのである。こんな公務員がいるのか、ますます宇宙人が紛れ込んだに違いないと思ったものである。

そのうち、こちらも段々慣れてきて、ユニークな発想ということでは理解できるようになっていったが、まとめる段階になって、彼らが、ここで、まとめてしまうべきでない、と言い出したときは、いよいよメンバーと事務局の対立という構造になってしまった。事務局としては、職務として進めてきた以上、一定の成果を得る必要があつたし、メンバーの側では、道職員だけで結論を出す手法は堪えられないものであつたようである。結局、双方折り合つて、大事なことを民間組織に委ねる形で、「北海道遺産」としてまとめたのだが、メンバーには不満が

残ったようである。F.K氏は、事務局の不当に触れながら、検討経過と提案の趣旨を説明した、報告書「外伝」を作成し、メンバーに配った。私にもくれた。

その後、「北海道遺産」は、民間の構想推進協議会ができ、座長の指導の下、公募メンバーが強く主張したとおり、民間主導という形を守って進められてきた。メンバーは、「勝手連」と称して、側面からの応援を続けている。

本来業務のかたわらのプロジェクトであり、公募で手を挙げたメンバーが本気で取り組むのは当たり前と言われるかもしれない。が、本気の度合いが半端でない。たまたま興味のあるテーマだからというのではなく、もっと根底から、強固な意志、ミッションがあるように感じる。彼らのミッションと担当業務とが、うまく結びつかないことも多いと思われるが、適合したら、大変な力を発揮することになるはずだ。

先に、「北海道遺産」は民間主導で進められてきたと述べたが、道側の担当者の貢献も大きい。Y.K氏の起ち上げ時の奮闘、後任のK.M氏の普及への努力には、目を見張るものがある。彼らの生来の資質か、あるいは、人事の妙で、彼らのミッションと担当業務がたまたま適合した結果か、いずれにしても、そこに、本気で取り組む道職員がいた。

宇宙人のF.K氏とは、その後、たまたま同じ職場に勤務する機会があった。担当業務は、残念ながら彼のミッションに適合するものではなかったようだが、職場の多くの者が、彼の人となりに助けられた。それも、彼のミッションの一部であったのかもしれない。赤プロ報告書「外伝」は、今も大事にしまっている。

## 6 「ボラナビ」

1998年、NHKでキャスターをされていたM.M氏がボランティア情報のフリーペーパー、「ボラナビ」を創刊された。ボランティアをしたい人と、してほしい人をつなぐ情報提供というのは、世の中が必要としている分野だと思ったが、無償配布で続けられるとは思えなかった。予想に反して、1年、2年と継続されたとき、今度は、そのうちM.M氏は、当初の目的達成ということで、やめてしまうか、他人に任せてしまわれるのではないかと、別のことに挑戦されるのではないかと、思ったが、「ボラナビ」は、今もNPO法人ボラナビ倶楽部が、代表M.M氏の強いリーダーシップの下で発行されている。

M.M氏は、これとは別に、ハンディのある人々がパソコンを操れるよう支援するNPO法人札幌チャレンジドを組織されたほか、ボランティア活動の普及、発展のために、全道を走り回っておられる。広報誌のレポーターやテレビ番組のキャスター、道の審議会などの委員もされており、活動分野も多岐にわたるが、基本がぶれない、なれ合わない、強固なミッションを持っておられるようだ。

「ボラナビの集い」というのが、種々のテーマを設定して、毎月1回開かれていて、一時期、よく参加させてもらった。印象深いのは、テーマの内容もさることながら、そこに集まる人々である。ボランティア活動をしたいと考えている人々は、実にたくさんいて、多様なタイ



ブがあることに驚かされる。

まず多いのは、リタイアした人、リタイアを近く迎える人などのシニア世代である。今まで会社や家族のためにがんばってきたが、リタイアしたら、世の中のため、他人のために役立つことをやってみたい、というのである。個々の人を見れば、うまく活躍の舞台が見つからないことも多いと思われるが、合わせて見れば、対価を求めないで社会貢献をしようという莫大なエネルギーがそこにあるわけである。

かつて、NPOの集まりで、役所や企業で活躍していた人が、リタイア後、NPOに再就職して、座る席の位置に文句をつけたり、何でも部下に命じてやらせようとしたり、従来の職場の感覚で対処し、軋轡を買ったという話を聞いたことがある。現場から見れば、この人は何を考えてるの、という感じである。否定的な例を捜せばほかにも多数あるのかもしれない。

しかし、長年従事した仕事から解放され、ボランティアで新たな任務を得て、目を見張る活動をされている人も多い。実際、退職教職員で、教育相談に従事し、最初は戸惑いながらも、一人一人に入れ込んで、本気で相談に対処される人を目の当たりにした。現職の時は、多数の生徒を対象に、学校の教育方針に沿った指導を進めるため、特定の課題を持った子に入れ込むことを控えてこられたであろう教員が、退職と同時に精神的にもフリーになり、困難なケースに全力で取り組む経験を重ねることにより、すっかり雰囲気が変わってしまうのである。そうなると、長年、職業として培ったノウハウや、多少のことではへこたれない粘りなど、若い人がかなわないパワーが発揮されることになる。

間もなく、団塊の世代がリタイアの時期を迎える。何割がボランティアに向かうかはわからないが、天地がひっくり返るような大きな変化が起きる予感がする。

次に多いのは、若い人である。大学生、高校生はもとより、フリーターなど、職業が定まっていない人も多い。ボランティアクラブに所属しているためとか、大学でボランティア活動が単位として認めてられている場合など、動機や位置づけが明解な場合もあるが、何となくとか、学業や就職に意欲を持てない中で、ボランティア活動に転機を見いだそうとしている場合も多いように見受けられる。

こうした若者に対して、「他人の役に立ちたいとか言う前に自分のことをちゃんとしろよ」、あるいは、「自分のことがちゃんとできない奴が人の役に立てるか」、という批判、というより誹謗をよく耳にする。NPO活動を熱心に進めている人の中にも、「うちでは、ボランティアは、あてにならないから、使わない。ボランティアに構っている手間がもったいない。お金をやりくりしても、きちっと雇った方が良い。」という人がいる。

私の見たところでも、確かに、ボランティア活動をしようとしている人の中には、自分のことにうまく対処できていない人も見受けられるようである。大丈夫かな、という感じの人もある。

しかし、もっと重要なことは、こうした若者が、現に、自分のことでは行き詰まっていることであり、役に立てるかどうかわからないが、他人の役に立ってみたい、とボランティア活動

の門をたたいていることである。そして、ラッキーな場合には、他人の役に立てる経験をする  
ことで、また、自分のことに向き合う力を得ていく。アンラッキーな場合には、多分、別のボ  
ランティア活動を探すのだろう。

私自身のボランティア経験について、先に、動機は不純だが、偽善ではなく、切実なものだ  
った、と述べたのも、このような意味である。

さらに、印象深い例として、こういうケースがあった。彼は、福祉施設に正規職員として採  
用されたのだが、休みの日に、職場とは別の福祉施設に、ボランティアで通っているというの  
である。福祉を天職と定めても、現実の職場では果たせないことも多く、ボランティアの場  
で、補完したい、ということらしい。あるいは、ボランティアの方が本命で、職場は、その資  
金稼ぎなのかもしれない。

これらとは別に、ノブレス・オブリージュといって、物質的にも、精神的にも豊かな人々  
が、十分ゆとりを持って他者に分け与える善意、奉仕の精神に基づいた活動もあり、それはそ  
れで社会にとって大切なことであると思う。しかし、ボラナビの集いで、出会った人々の多く  
は、それ程余裕はなく、定職があるにせよないにせよ、それぞれに切実な思いで、ボランティ  
ア活動を求めているのだと思う。

## 7 よさこい赤れんが会場と「草鞋を作る人」

よさこいソーラン祭りは、今や、札幌雪祭りと並ぶ北海道を代表するビッグイベントである  
が、メインの大通り会場のほか市内各所に会場があり、地元商店街の人々や、多くのボランテ  
ィアによって支えられている。道庁赤れんが会場は、行政書士で、まちづくりに取り組まれて  
いるN.M氏の呼びかけで、毎年集まる協力者や、その都度募集したボランティアの手で運営  
されてきた。道は、場所を貸しているだけという立場だが、関連部局の職員や先に述べたワー  
クショップを主催したW.K氏など道職員有志も手伝っている。私も当日だけであるが、何度  
か参加してきた。

よさこい会場のルールの一つに、会場の安全管理、警備をきちっと行うということがあり、  
本部で用意するプロの警備員のほかに、自前で多数の警備係を配置する必要がある。募集に応  
じたボランティアの多くには、道庁の門や池の周辺で、立ち番をしてもらうことになる。ボラ  
ンティアの多くは、よさこいが好きで来てくれたのだが、踊りをほとんど見られない、おもし  
ろくない任務である。実際、あまり人の通らない池のそばで、遠くからよさこいの音楽だけ聞  
こえてくる状態で、一人立っているのは、つらい。寂しくなって、帰ってしまったボランティ  
アもいた。ローテーションで場所を代えたり、遊軍が巡回したり、工夫もしているが、警備係  
が活躍する場面はなく、感動的な任務でないことは確かである。しかし、大通り会場では事件  
が起き、スタッフが大けがをした。幸いこれまで赤れんが会場で事故が起きていないのは、警  
備係が各所で見張っていたからだと思う。警備係の出番がないことは、とりも直さず、任務が  
果たされた結果である。そして、多くのボランティアが、手伝いたくて来たんだからと、嫌が

らずに任務を果たしてくれている。

今、あちこちで市民手づくりのイベントが行われているが、よく見ると、膨大な数の裏方があることがわかる。仮設駐車場への誘導係は、最も重要である。見て、食べて、買って、十分満足した帰り、無愛想な誘導係のために気分はぶち壊し、二度と来ないぞと思ったことがある。ゴミ箱が満杯で、あふれ出ている、そのまま見ぬふりということもあった。最近では、主催者が、こうした裏方の仕事の重要性を認識するようになってきた。回を重ねることで、スタッフが技術的に上達したことも大きいと思う。各地のイベントで、腹が立つより感心させられることの方が多くなった。

層雲峡温泉の花火のあとの見事な車の誘導、交差点で、随分長く止めるなあと不満を感じたが、小刻みに手信号を変えるより、一定時間流れを一方向に限った方が効率的なのである。結果として、予想以上に早く国道に戻ることができた。ブーイングに耐えて、確信を持って車を止める誘導員のおかげだと思う。

ウトロのオーロラファンタジーの駐車場誘導員の丁重さ、無料の催しを見に来ただけの日帰り客をも歓迎しようとする姿勢には頭が下がる。感動箱にお札を入れ、今度は泊まりで来ようという気持ちになった。とはいえ、感動箱が協力金で溢れる程、世の中甘くはない。この催しも、2005年から有料にせざるを得ず、日帰り客は百円玉が何個か必要になるようである。地元関係者は、理想が続けられないことで、恐縮しておられたが、私から見れば、この催しは、控え目に見ても、千円以上の価値があり、有料化といっても、ごく一部を広く、浅く、負担してもらおうというだけである。お札を入れたくなる人もいるはずで、感動箱は残された方が良いと思う。

こうしたお祭りやまちづくりの活動を進める上で、N.M氏や、W.K氏のようなリーダーはもちろん重要で、私は、こうした人材が今の10倍ぐらい出てきてほしいと願っているのだが、他方、目立たないところで、黙々と任務を果たし、それでいて愛想の良い、フレンドリーな人々は、そのまた10倍、100倍も、必要とされていると思う。

「かごに乗る人、担ぐ人、そのまた草鞋を作る人」ということわざがある。辞書を見ると、大金持ちから貧乏人まで、世の中様々で、持ちつ持たれつという、ある種の諦観をあらわしたことばで、積極的な意味はないようだが、私には、いろいろ役割があるが、草鞋を作る人がいなければ世の中は回っていかない、とっているように聞こえる。「よさこいソーラン、旗を振る人、踊る人、(踊る舞台を仕切る人)、その会場を遠くから見張る人」というわけで、見張りがいないと踊りは成り立たないのである。

そして、もっと大事なことは、かごに乗る人と、草鞋を作る人は、交代できないが、去年旗を振っていた人が、今年は見張りに立つというのは珍しくないこと。よさこい赤れんが会場を仕切るN.M氏も、別の企画では、ただの見張りやびら配りに立ってくれている。役割が固定的ではないのである。そこが、ことわざと全く違うところである。

## 8 幌内の灯

2003年7月17日の午後、私は、「みかさ・炭鉱の記憶再生塾」が主催する幌内線を歩くツアーに参加した。札幌国際大学のY.H氏から案内メールをいただいております、一度参加してみたいと思ったからである。参加費500円、三笠市街クロフォード公園に集合し、Y.H氏や再生塾事務局長のI.T氏などの案内で、旧幌内線2.8キロを歩くことになった。私は、よく知らないで参加したのだが、その日の夜、線路展2004「幌内の灯」というイベントが計画されており、参加者は、線路に灯すろうそくを置きながら歩いたのである。ペットボトルを加工したろうそく立てが配られ、一定間隔で線路の両側に置く。踏切の前後には集中的に置くとか、老人施設の近くは多めにとか、ここからは理解が得られていないから控えるとか、細かい指示を受けながら、しかし、休み休みののどかなツアーであった。私は、夕方には札幌に戻り友人と会うつもりでいたが、このろうそくが灯るところを見ない手はない、と思い、急遽友人の方を三笠に呼び寄せ、日が暮れてから、「幌内の灯」を見ることにした。2.8キロにわたって6百数十個のペットボトルキャンドルが続く。

感動的な光景であった。どっと人が押し寄せたわけではないが、2.8キロを往復する間、たくさんの人々とすれ違った。皆、感激しているように見えた。お年寄りがたくさん出てきていたのも印象的であった。空知管内旧産炭地では、炭鉱施設を産業遺産として保存したり、観光に活用したりする取り組みが各地で進められている。「炭鉱の記憶」のある人々にとって思いは格別であろうと思うが、「炭鉱の記憶」と全く無縁の私でも、何か懐かしい感じがし、やさしい気持ちがわきおこる。小樽運河の場合と異なり、ツアーに参加しただけで、ボランティアに加わったわけではないが、得たものは同じである。良い体験をさせていただいたと思う。

## 9 赤れんがフェスタ

2003年6月、私は、再び、知事部局に出向となり、道庁経済部観光振興課に配置された。国内外での観光客誘致活動やPRイベントを担当している。夏には、実行委員会組織で、赤れんがフェスタという花と音楽のお祭りを開催した。道庁主導で開催してきた赤れんが音楽祭を継承するイベントだが、今では、民間協賛金が主な財源である。事務局を担ってもらっているNPO法人花ネットワーク、M.K氏の人柄と幅広い人脈に支えられて、何とか2年続けてきたというところである。もちろん道庁も有形、無形の支援をしており、私も、開催期間中、できるだけ現場に張り付くようにしてきた。

かつて赤プロや未来セミナーの場で、より道民に親しまれる庁舎や道有施設の有効活用が議論されるのを間近に見てきた私にとっては、こういうイベントに職務として関われることは幸運であったといえる。

2004年は、東アジアを中心とした外国人観光客へのおもてなしを試みるウェルカム・ボランティアを置くことにした。札幌国際大学、高校長協会などに協力をいただき、N.M氏などよさこいボランティア、I.T氏など赤れんがガイドOB、北海道チャイナワークのC.S氏、韓

国語通訳のO. S氏、観光バージョンアップ協議会のM. M氏、日本観光協会道支部のS. K氏、S. S氏、等々、多くの方々の応援も得て、ボラナビを見て来た高校生を含め、50人近いボランティアに参加していただいた。

当方の準備不足から、おもてなしの試みは必ずしもうまくいかず、後日、参加したボランティアから厳しい感想もいただいた。逆に、やはりボランティアはあてにできない、という面もあった。いずれにしても、イベントでボランティアに活躍してもらうためには、当日人が集まってくれば何とかなるという安直なものではない、周到的な事前準備が必要であることを痛感させられた。

次の機会が作れるかどうかはわからない。しかし、赤れんが庁舎の前でボランティアができて楽しかった、と素直に喜んでくれた人もいた。その人には、是非また別のボランティアに挑戦してほしいと思う。そして何より、この機会に多くの方々の協力が得られたことが嬉しい。また、別のところで、立場を代えて協力し合えることもあるかもしれない、と期待している。

## 10 災害復興支援

阪神淡路大震災でボランティアが大活躍し、災害でボランティアが大きな力を発揮することが知られるようになった。有珠山の噴火のときも、また、2004年の新潟県中越地震でも、災害復興はボランティア抜きには考えられなくなってきている。あてにされるようになり、受け入れ窓口を整備して、効率的に働いてもらおうという動きもあるようだ。

しかし、そういう意図とは関係なく、じっとしていられず駆けつけた人とか、休暇をとって何回も通っている、そのまま帰らず仕事をやめてしまった、とかいう人もいようである。何がそこまで人を動かすのか。宮沢賢治の「雨ニモマケズ」のような、崇高な人がそんなにいるものか。

私は、災害復興支援のボランティアに参加したことはなく、確かなことはわからない。ここからは推測であるが、中には、本当に崇高な神様のような人もいるのかもしれないが、多くは、復興支援活動を通じて、日常生活では経験できない貴重な体験をされてきており、それで災害と聞くと、また、駆けつけようとされるのではないかと考えている。

## 11 人を育てるボランティア活動

ここまで、ボランティア活動にかかわって、私自身の体験に沿って、記してきた。私の思い込みに過ぎず、納得されない部分があるかもしれないが、少なくとも、これからの社会を考えた時、ボランティア活動の果たす役割が余りにも大きいということについては、理解が得られるのではないかと、思う。さらに、福祉系、環境系、国際系と称される分野では、一層、ボランティア活動の比重が大きいはずであるが、私は経験が乏しく、不得意領域なので、あえて触れない。そこで、職務とかかわりの深い、教育の面と、経済とのかかわりについて、以下、述べてみたい。

小樽運河でボランティア活動をしたが、実は、体験をさせてもらったのだ、と冒頭で述べた。ボランティアは使わない、というNPOがあることにも触れた。私自身も、周到的な準備が必要なことを実感した。しかし、ボラナビには、毎号、毎号、ボランティア募集の記事が満載である。どういうことだろう。そこで気がついた。ボランティア活動の趣旨目的は、多種多様だが、根底に、人を育てようという共通のミッションがあるらしいのだ。祭りを成功させたい、小樽に人を呼びたい。でも、その過程で、人が育つことが嬉しい、と小樽雪あかりの路の方々は考えておられるに違いない。三笠の再生塾は、もっとストレートだ。三笠の再生ばかりでなく、人の再生を目指しておられる。

1999年、後志管内の道立学校に勤務する新任教職員の研修を黒松内町の自然学校で行った。自然の家に宿泊し、貝の化石とりや、ぶな林ウォッチング、ネイチャーゲームなど、主に野外活動の研修を行った。総合的学習の時間の設定などにより、教育課程に体験活動を導入することが求められている中で、教員自身の体験が不足しているとの認識から、教員研修にこうした自然体験や野外活動が取り入れられるようになったのである。

私も一部受講させてもらったのだが、NPO法人ねおす理事長のT.H氏のお話をきいて、目から鱗、感化洗脳されてしまった。話が上手、その気にさせる巧みさと迫力、そして何より話しを聞く自然環境。また、ぶな林を歩いていて、ガイドがひょいと落ち葉をめくると現れた「ぎんりょう草」の可憐さ。私自身どちらかというとアウトドア派で、何度もぶな林を歩いていたが、落ち葉の下で、こんな花が咲いていることは知らなかった。ガイドの演出とわかっていても、深く感動してしまったのだ。

その後、いろいろな場面で、T.H氏のお話を聞く機会があった。大自然の不思議や魅力を通して、人と人との交流を進めることに力を注いできた、これまで若い人を中心に育てて来たが、これからは、高齢者に焦点を当てて取り組む、ともお聞きしたが、いずれにしても、人を育てることに強いミッションをお持ちの方である。

一方、学校では、というと、社会の変化や生徒の多様化に対応して、それぞれの学校で、地域と連携した取り組みが進められている。従来、閉鎖的と言われてきた学校も、地域の教育資源、人材を活用し、外の力を借りることに次第に慣れてきたといえる。後志教育局在勤中に、私は、こうした学校の取り組みや教職員の努力をたくさん見て来たので、知らないで論じている人には、「教育現場も精一杯がんばっているんですよ、よく見てあげて下さい」、と言いたい。

しかし、公教育という枠組みの中で、学校には制約がある。体験学習といっても、教育課程に位置づけるためには、ただ体験させれば良い訳ではなく、体系的、組織的に指導計画を組み立てなければならない。管理上のリスク回避策も練らなければならない。デスクワークが増え、まじめな教員は益々多忙になる。

今、教育行政に身を置かない立場だから言うのだが、学校では、何事であれ、まじめに考え過ぎる傾向がある。体験学習についていえば、もっと気軽に、多様なことをどんどん体験させれば良いと思う。個人差があり、個人の内でもタイミングがある。琴線に触れて、ヒットする

こともあれば、何でもなく通り過ぎることもあるのではないか。在学中を通じて、ワンヒット出れば幸い、ぐらいいに楽に考えられないか。その都度、全員に感想文を書かせるなどは、論外だと思う。やはり、もっと外の力を借りた方が良い。T.H氏のような民間教育者、力を持て余しているシニア、柔軟になった退職教員、そして行き場のない若者など、力を貸してくれる人々は無数にいるはずである。

学校外ではどうか。社会教育も奮闘している。後志では、落ち研出身の社会教育主事が高齢者大学や保健所で、落語を演じたり、博物館では定期的にミニコンサートが開かれたり、素人の人形劇団が出来たりと、柔軟な取り組みを目にしてきた。公民館に村人を集めて教育を施す、という感覚ではさすがになくなってきている。地域の方々の中に、ずっと優れた、魅力的な人材がたくさんいるからである。こちらも、もっともっと外の力を借りるのが良いと思う。もはや、教育ということばにそれ程こだわらなくても良いのではないか。

最近になって、生涯学習支援者ということばを知った。響きが好きだ。よく勉強していないので、間違っているかもしれないが、私自身、これからも学習のために支援は受けたい。できれば、支援者でもありたいものだ。

## 12 サービス経済化とボランティア

道庁経済部の職員としては、もうかる仕組みを考え、ビジネスとして成り立たせることができないからではない。ボランティア活動が重要で、それで人が育ったとしても、さあ、何をして食べていくのか、それが問題である。

営利、公共、非営利の3つのセクターのあるべき関係を大上段から論じる力量はない。言えることは、各地の具体的な取り組みの中で、協働と役割分担の問題は、顕在化し、議論され、新たな関係が模索されていく、そうした集積の上に自ずからあるべき仕組みが出来ていくのではないかということである。

そこで、小樽運河から考えたもう一つのこと、経済に関わることを述べておきたい。

お祭りの手伝いをしていて感じたことは、おもてなしをする、サービスをするということ、は、元来、楽しいことなのではないか、それが利益につながるものであれ、無償のものであれ、自分がしたこと他人が喜んでくれるというのは、そもそも愉快的なことなのではないか、ということである。仕事の中には、きつい、きたない、危険、というものもあれば、人の嫌がることをあえてしなければならない職種もある。しかし、3次産業の比重が高まり、サービス経済化が進む中で、人が従事する仕事の大半は、他人が喜ぶサービスの提供になってくる。法令に触れたり、公序良俗に反するものを除けば、こうしたサービス業では、サービスを提供する側にとっても、基本的に楽しいものであり得るのではないかと思ったのである。

今、若い人が定職を持たないこと、就職しても定着しないことなどから、正しい職業観、職業意識を持たせる指導や、インターンシップなどにより就業体験をさせることが求められ、責任感、持続力、忍耐力など、今の若者に欠けているといわれる資質を培うことが重要と言われ

ている。それも大事だ。しかし、仕事の楽しさ、喜びを知ることが先ではないのか。

地域の人々と一緒になって実習するとか、高校生が、商店街に店を出したり、ビジネスプランの提案をしたりする試みも行われている。そうした中で、生徒が、相手が喜んでくれたことの喜びや、自分の企画がうまくいった場合の達成感などを味わい、こうしたことを職業とすることに意欲を持つようになり、また体験を重ねる、という良いサイクルができてきている。

働くことが苦役であった時代があり、今日でも、そうした場面がなくなった訳ではない。しかし、今や、好きなことを楽しく続けることや、他人の役に立ちたいと願うことの延長に、職業を選ぶことがあり、仕事を続けることがあり、さらには、起業がある。そして、経済活性化につながるビジネスチャンスもそこに広がっているのではないかと考えている。

### 13 組織と個人の力

グローバル化、情報化など社会が複雑になる中で、個人の力は卑小化し、組織の一員になると個々の事情は考慮されないと思われがちだが、逆に、組織の一員として業務に従事する場合でも、本人の希望や意欲の重要性が見直されているのではないかと。組織全体が最大の成果を挙げるには、個人をむやみに組織に従わせるよりも、細やかに構成員のインセンティブを引き出した方が効果的な場合もあるということに気づき始めているのではないかと、思う。

道庁でも、一部の業務ではあるが、庁内公募制を採用するようになった。通常の人事異動でも職員の希望は考慮されるが、皆が希望どおりにはいかない。公募制では、応募する職員の能力や意欲と、募集する側の要求や期待が突き合わされ、マッチングが行われる。採用になった職員は、生き生きと職務に邁進し、一層能力を発揮するであろう。そして、こうした公募職員が近くにいることが職場にプラスの影響を及ぼすことも期待できると思う。

ボランティア活動でも、NPOでも、リーダー個人の影響力が極めて大きい。NPO法人が増えているが、法人だからと鵜呑みにする人はいない。〇〇氏らがやっているNPOだからというので信頼するのである。一方、官庁や大企業では、従来、組織の信用や肩書きが担保になってきた。しかし、道庁も経験したが、今に至っても無軌道な官庁や大企業が後を絶たない。組織は当てにできない。

かつては、勤勉で従順な人材が大量に必要とされた時代だったので、組織に適応することが善とされ、個人の力が過小評価されてきたのではないかと。そうした風潮が蔓延し、若い人々が無力感、閉塞感に陥ってしまった。今、世の中の大きな変わり目に際して、個人の突出したパワーや、活力が必要とされてきているのに、若い人々はどうかという、フリーターどころか、学業にも、就職にも意欲を感じられず何もしていないニートと呼ばれる人々が大量に発生しているのである。

こうした状況をどうやって打破するか。私は、やはり、ボランティア活動であり、体験学習であると思う。他人の役に立つ経験や個人の力が発揮される経験を積み重ねることで、学業へ、就職へ、さらには起業へと、意欲が向かっていくのではないだろうか。



## 結 語

小樽運河での体験から、いろいろ考えたことを述べてみた。詰まるところ、ミッションを持った個人が大事である。そこで、お前のミッションは何かと問われるかもしれない。胸を張って言えるものはないが、改めて考えてみると、私は、やはり、人を育てることにかかわって、その手伝いをしたい、多少とも役に立ちたいと考えてきたと思う。父が教員で、退職後は、もうからない私塾を細々と続けていた。私は、教員にだけはなりたくなく、回り道をしたが、教育行政に従事することになった。楽しくはない業務も多いが、間接的には人を育てることへの支援になっていると思いたい。

最近、もっとも感動したのは、2003年10月の全国産業教育フェア北海道大会である。道内専門高校の生徒たちが1年前から実行委員会を組織して、準備を進め、全国大会の企画、運営に当たった。札幌東商業高校生徒のT.A氏は、マスコットキャラクター「くーちゃん」「まーくん」を考案するとともに、イメージソング「未来」を作詩、作曲した。自ら歌ったC.Dが宣伝に用いられ、道庁舎のエレベーター内や、札幌市内中心部の商店街でも、流された。

本番での、生徒たちの働きも見事だった。高校生が、そこまでやり遂げることに感動した。同時に、そこまで任せた関係者にも敬意を表したい。道教委で事務局を担ったK.K氏などの、フェアのPRのためならどこにでも飛び込んでいく積極性や、札幌東商業高校長T.K氏をはじめとした各地の専門高校の教職員の生徒の成長を見守る深い愛情がなければ、実現できなかっただろう。まさに、「学習支援」である。

2004年11月、「さんフェア北海道2004」は道内の高校だけの参加で、規模は小さくなったが、卒業した全国大会の実行委員も駆けつけ、後輩たちを励ました。例年の全道大会より、気合いが入っているように見えた。看護科の生徒が臨床実習体験をまとめ、保健士を目指す決意を語る。商業科の生徒が上海へ単身赴任の父親の力を借りて、進出企業のビジネスを分析する。通常の卒論（大学）のレベルを超えていると思われた。もっと多くの人々、世の中に見せつけたい内容であった。

最後に、現在の職務について、北海道観光を発展させるために、どうすべきか。個人、シニア、滞在、体験などこれからの方向性を示すキーワードはあるのだが、そうはいっても、従来のあれやこれやも、ないがしろにはできない、やってきたことで検証が足りない面もある、という訳で、責任があるだけに、ひとことでまとめることは難しい。

そこで、仕事を離れ、個人的な感想としてであるが、私は、北海道観光を発展させるためには、結局、冒頭の小樽運河に戻ってしまうのだが、ミッションを持った地域の人々が結集して、時間と手間をかけて、本当の感動体験の場、人が育つような場を作り上げていくことが、何よりも大切ではないか、と思う。そして、ニセコ町長のO.S氏は「地域の機微に触れる旅」と表現されたと思うが、こうした人々の心を揺さぶるような、「心の琴線に触れる旅」を提案していくことが必要ではないかと考えている。